

# スクールカーストといじめ被害リスクについての考察

－行きたくないが生きたくないに変わる前に－

今村麻衣

(愛媛大学大学院教育学研究科心理発達臨床専攻)

## 背景と目的

いじめの要因には様々なものがあるが、その中のひとつに「スクールカースト」が挙げられる。小原（2021）はスクールカーストを「小学校の高学年から中学，高校のクラスにおける，生徒の閉鎖的なグループ間に見られる，認識された人気に基づく上下関係の階層構造」であるとしている。スクールカーストでは上位から「1軍，2軍，3軍」などと呼ばれ，児童生徒は自分のランクに見合った行動を求められる。1軍の言動を絶対とするクラスの雰囲気や，3軍を仲間外れにする行為はいじめにつながる可能性が高い。児童生徒に関わる人々は，スクールカーストが学校に存在することを理解し，子どもたちの学校に「行きたくない」気持ちが人生を「生きたくない」気持ちに変わる前に対応することが必要である。

そこで，本研究ではスクールカーストといじめ被害リスクの関連について明らかにすること，そしてスクールカーストが効力を持たないような居場所について考察することを目的とする。

## 方法

- (1) スクールカーストに関連する文献から，スクールカーストといじめ被害リスクについて調べる。
- (2) スクールカーストが効力を持たないような「居場所」について，X県Y市のフリースクールなどでフィールドワークを行う。

## 結果

森口（2007）は，スクールカーストの地位の低さはいじめの対象になるリスクを上げるが，いじめの対象となることでスクールカーストが下がるというように，両者は互いに原因と結果の関係になっているとしている。そのため，一度いじめの対象となると容易に抜け出せなくなる。スクールカーストの地位が低いことでいじめられるリスクが高くなる→いじめ被害者になる→いじめ被害者はスクールカーストでの地位が低くなる，というような悪循環が生じているといえる。

和田（2013）はスクールカーストによる序列は人気者ランキングであるとしており，3軍はコミュニケーションが下手なため人気がなく，友達もいないため，クラスの輪から外されてしまっている。水野ら（2019）は人気といじめ被害は負の相関であり，人気が高い生徒ほど攻撃的であり，人気が高い生徒ほど攻撃の被害に遭う可能性が高く，時にはいじめにも発展する可能性を示唆している。これらの結果から，スクールカーストにおける地位といじめ被害リスクは関連があると推察される。

フィールドワークを行った結果，Y市には子どもたちの居場所が様々な形で用意されていることがうかがえた。筆者がフィールドワークを行ったフリースクールには，6名の児童生徒が通っており，そこでは異なる学年の仲間と接するため，スクールカーストは関係ない。少人数であるため全員に発言権があり，スクールカースト関係なく学年の異なる子どもたちが関わることのできる居場所となっていた。

## 考察

文献調査から，スクールカーストは人気と深く関わっており，人気がないと攻撃を受けやすく，いじめに発展する可能性が示唆された。スクールカーストを決めるのは「人気」であるが，「人気」は自分の努力だけで向上させるには限界がある。そのため，スクールカーストの地位はいじめ被害リスクに関連するが，一度いじめ被害者になると低い地位から抜け出すのが難しく，再びいじめられるリスクが上がるという悪循環が生じるという問題がある。

フリースクールでのフィールドワークからも，スクールカーストが効力を持たない居場所について，①多様な背景，年齢の児童生徒がいること，②全員に発言権があることの2点が重要であると考えられる。これらを学校現場で実現するには，授業や部活で他学年や地域の人との交流の機会を増やす，発言がしやすいような小グループを形成するといった方法が考えられる。